

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。  
阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

## 郵便はがきの考案と 駅通史の編さん

青江 秀

青江 秀は天保5年（1834）、阿波国那賀郡西方村（現長生町西方）に生まれた。読書を好み、漢学塾で学び神童とうたわれていた。

嘉永6年（1853）19歳で徳島藩に出仕。その才能を見込まれ、長崎に留学を命じられている。明治4年（1871）11月、大蔵省に出仕。大蔵省紙幣局に勤務し、紙幣の発行に関与する。明治7年（1874）9月、40歳で退職。「東京曙新聞」の社長として活躍した。

その後、明治12年（1879）4月に駅通局長の前島 密に招かれ駅通局に出仕。明治13年（1880）3月、駅通局御用係を申し

付けられ、「駅通志稿」の編さんを担当する。「駅通志稿」は、わが国における幕末までの道路・宿駅・公私の旅行・人馬の駅伝・信書の往来などの発達の概要をまとめ、さらに明治の郵便創業の記録にも及び、明治初期に編集された本格的な「駅通史」としては類のないものとして高く評価された。

さらに「駅通明鑑」もこの年に出版されている。内容は慶応3年（1867）10月の徳川幕府の大政奉還から明治5年（1872）までの駅通関係の公文書を編年別・事項別に編集した唯一の資料集である。

青江は短期間の内に「駅通志稿」・「駅通明鑑」という貴重な著書の編集の中心になった功績が認められ、明治15年（1882）従七位に叙せられた。

青江の功績の中でも、今も恩恵を受けているものに「郵便はがき」がある。明治6年（1873）11月の布告には、カタカナまじりで「郵便ハガキ」と書かれ、現物につけられた名称も「はがき」であった。次いで同8年（1875）6月の公文書には漢字を用いて「端書」と明記されている。この名称について、同12年（1879）ま



青江 秀氏が発案した「郵便はがき」

で漢字の場合は「端書」と記された。12年以後は「葉書」と書かれるようになった。この両者をまとめて「郵便はがき」の名称を考案したのが、大蔵省紙幣局に属して、印刷の監督をしていた青江であった。

明治初期、数々の書籍の編さんの中心となった青江。彼の部下を思う人間性は、関係者の間で、あるエピソードが語り継がれている。

明治6年正月、青江の部下が九州に出張した際、折悪く百姓一揆の集団に遭遇してしまう。全身に手傷を負いながら逃げるも、寺の境内にて割腹して果てた。

事件を知った青江は、部下の家族を訪ね、悲しみに沈む彼らを激励した。さらに自ら現地におもむ

いて部下の壮烈な最期の様子を聞き、慰霊のまことを尽くし、帰京後も遺族のために支援を惜しまなかったという。

明治16年（1883）5月、青江は海軍省の修史編さんのため転勤を命じられ、編集の中心となる。その後、明治19年（1886）2月、北海道庁理事官に任じられ、北海道開拓のため尽力した。

明治23年（1890）、郷里である長生町西方に帰郷したが、同年8月27日、病のため逝去。享年56の波乱に満ちた生涯を全うした。

次回3月号は、郷土史研究家の島田 麻寿吉氏です。

問い合わせ

文化振興課 ☎ 22-1798